

成形圖說卷之九

目錄

均田トク

黃冊トク

役丁トク

附度竿トク



成形圖說卷之九

明治九年購求

成形圖說卷之九

農事部均田

班年 田書紀 ○續紀 天平元年三月 璣口分田 依令 收授 於事 不

田六 便請 悉收 更班 令義 解班 頒也 田所以 殖五 穀之地 也 凡

校田 史令 式等 子地 校改 らる 田使 の事 所以 使と 考れ し 一 度 づ

給田 賦以上 同 上 又 曰 收 數 田均 給 於 民 ○持 統 紀 子 出 八

田割 孝德 紀 分 割 水 陸 多 河 多 訓 延 喜 式 謂 授 田 也 八

部田 官部 八 田 檢 田 寺 藏 書 中 承 安 三 年 十 一 月 十 五 日

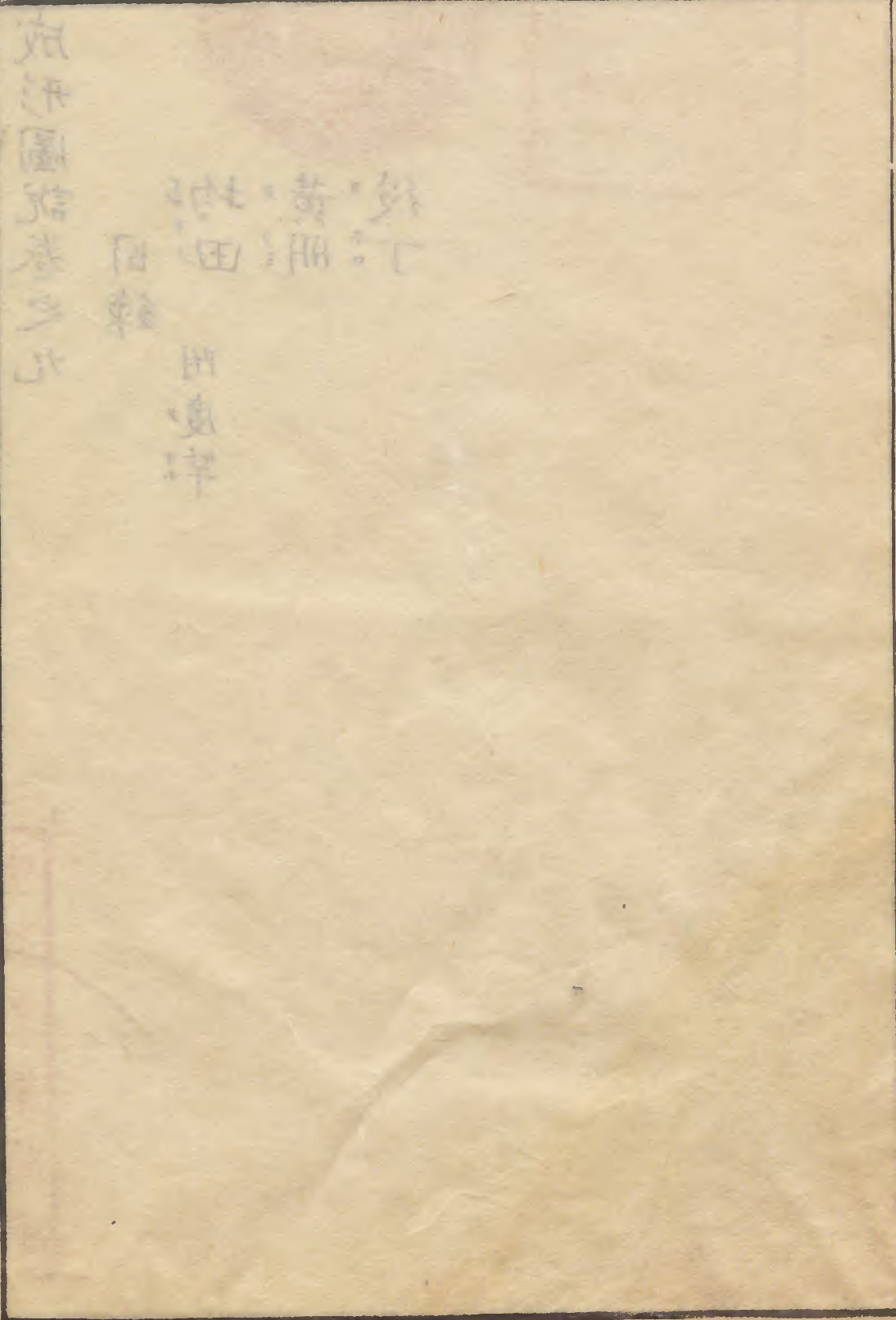
地の 勘 事 寺 藏 書 中 承 安 三 年 十 一 月 十 五 日

視と 檢 田 寺 藏 書 中 承 安 三 年 十 一 月 十 五 日

謂班 田收 授の ば 古 子 竿 入 地 押 地 取

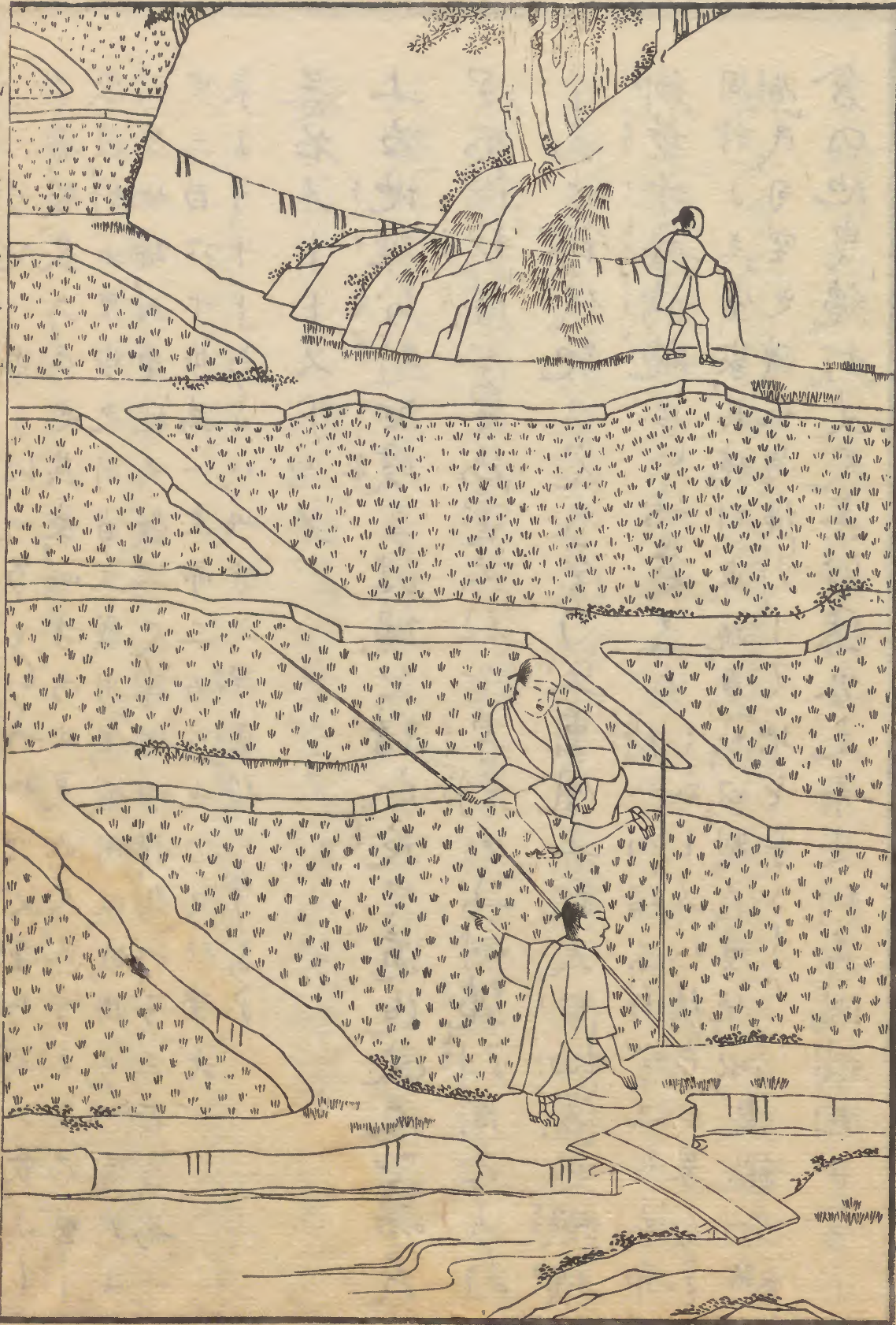
成形圖說卷之九

二



均田五代史周世宗嘗夜讀書見唐元稹均田圖歎曰此致治之本也詔頒其圖法吏民先習知之期以一歲大均天下方田通典宋熙寧五年重修方田法○文獻通考宋神宗定方田法參定肥瘠而分五等以定稅則括田廣治平畧○玉海開元九年以宇分田孟子分文融為括田使括逃戶及籍外田量田大學衍義補今世量田用所謂步弓不知果古法否丈量清丈以上政刑大踏勘文勘以上明打量歸田錄以丈尺蕃名フメーテイーングハンデランデレイン孝德紀大化元年新詔曰凡國家所有公民大小所領人眾汝等之任皆作戶籍及按田畝謂檢覈墾田頃畝及民戶口年紀白雉三年至是班田既訖とんえつとん是諸國檢地の始ありとも是より前 履中の御宇檢按天子之

百姓とてハ公田と私と支配して檢地せしむ也田令曰凡按田先課役後不課役先無後少先負後富建武記曰就田數可支配事遠國三十町中國二十町近國十町別一人分面と可參勤當知行之地不足之輩者可沙汰渡課役於惣領若無惣領者可辨其郡催促之役人丈古事記○凡上古地と度記及長短と量る事丈と字云亦之と周と凡ちこ法まりの六尺一尺と云と卷ハ間竿よれりて此らとて弛附下よ田竿即量竿檢竿打竿尺丈ツツ度竿典通丈篙篙尺量以上郷談正音 歩弓大學衍義補按子唐山の畝率ハ自



歩を以て一町とすは六と一歩を以て一夫一日の食と
 して一町一年の食分を乞ふと云ふ志らるるまかく約らして
 いふ一乃王法と変られ一は万民争り窮^{ツボ}ぎしんさ
 ればは法再びおふ復^{カハラ}んこと井田一とび變して復一難
 がごごくちるべし蓋^{カサ}平氏丈量^{シヤウリヤウ}とせしるまじりの
 一と或一郡一或一荘と眞人あは六十餘畝の地は是
 ぎふとおもひくかくハ計らるるまやとあり義氏曰天
 正の前の水帳は一段三百歩とあり是は冬間より始るま
 此頃とつり又民間ありハ或六尺二寸より三寸四寸
 有^{マカヒ}崎等の差たり或曰文禄よりハの歩法六尺三寸一歩ハ

是^{アゼ}畦と除く宛めしあり或六尺五寸ハ畦越加て宛じ
 是^{アゼ}辺^ヘ界のまゝ田と人、家よりとる見^ミま田の畦ハ家の
 後居のまゝ一丈餘の歩法六尺三寸方ハ畚^{クニ}二帖の定尺
 也是と家の間ハ積^{ツキ}は六尺三寸ハ柱の中間毎ハあるま
 柱横六畝の家ハ六寸角八畝の家ハ八寸角あり家のま
 まで四角方のみハ柱の幅^{ハタ}は家者出入せし皆ハ横三尺一
 寸五分縦六尺三寸尺の身^ミを敷て廣くは狭くは次合
 る^{ツキ}儀なり然らば小^コ畦とつておしは六尺五寸^{ハタ}裕^ユを
 くお^オ大^オきまゝの畦と加ておしハま^マ好^コとあるまじく
 ある又檢竿のま^マ六尺五寸とあり六尺三寸とありと

て尺もバ是睦と除て究しるはるるべし
古事記傳曰凡家の柱と柱との中法中間と云ハ記の所謂ハ箇間あり律原發揮曰以曲尺六尺五寸為一步俗稱一間算路程用之又以六尺三寸為一步俗稱京間每間置席二間置間一其間四寸折半之配一間則得二寸以減六尺五寸餘六尺三寸為席一間之法算田積用之又以六尺為一步俗稱一間今按是後俗の從より瓊茅拾遺曰紫宸殿清涼殿等ハ七尺間也凡伸中指以十為一間臣下之屋作凡伸中指以九為一間故以六尺三寸為一間是古の制といつり
 ○凡竿よておがきき解交は繩引して地と量はと向繩又水繩管繩等の名何れ其繩約長一町或百間ふして一間のふし絢坐十間の所は色繩の記跡とほくふなる但繩よてを畝段展びて縮むゆゑ竿よてもお竿はうりよてを展びて置く竿を用ひ皆權道よりあつるふことなり

凡丈竿を二間ふして一丈二尺之と一間ふして一丈の
 設計とて心と百丈子丈といつごと寸歩と終らば次を
 量むるべき數百疋と竿取の巧拙よく板服何ふとを
 法どるは少と私よく細査とるは俗に物の麴
 語や一城増違とらふハ田地の省敷と相違やと云ふ
 いつり○竿を打り尺寸と去て某間まともなりと云
 十間五尺五寸とあつる付ハ十間半と定て零の二尺
 五寸ハ去とるも又十間半と定て二尺五寸づつ五
 尺と零とるも此ハ一方ハ十間半と定ておれり
 計るよ寸尺まで細く究むは及て穴費よ坐て煩
 しく伊急孝徳紀にも半と五寸と訓あるも五寸と云れ
 成形圖說卷之九
 七

東限岑山口 南限掘越山谷 水為殖供御地黃地又元亨
 西限岑 北限辛河合 二年四月廿日田粟津國小田村十條四里八坪の四至
 他領限西道限 北他領限南濱 四方限を究め以て所居宅まで差缺るべきを以て
 要日弘仁二年二月三日格田地占請之輩偏限四至不論
 町段是以檢四至則涉于官舍人宅勘町段則不滿四至之
 内求之政途理不合然自今以後占請地一定町段不依四
 至云云

田文 東鑑 ○拾芥鈔 田籍部あり康曆元年式目 日吉祇
 園北野神輿可造畢仰使節召出國大田文段別三拾

閣文 可檢納之 ○新田宮藏弘安八年薩摩國田文事神社佛
 御圖帳 是本民部省圖帳の畧言なり故に御の字と附

名寄帳 高辻帳 檢地帳 亦云野 圖田帳

黃冊 續文獻通考明太祖洪武十四年詔定編賦役黃冊之
 造其田地開豁各戸若于有官民田地二則係官田者照依

官田則例起科係民田者照依民田則例徵收俱黃冊有載
 賦額適均而力役 魚鱗冊 同上明太祖既定天下乃集糧

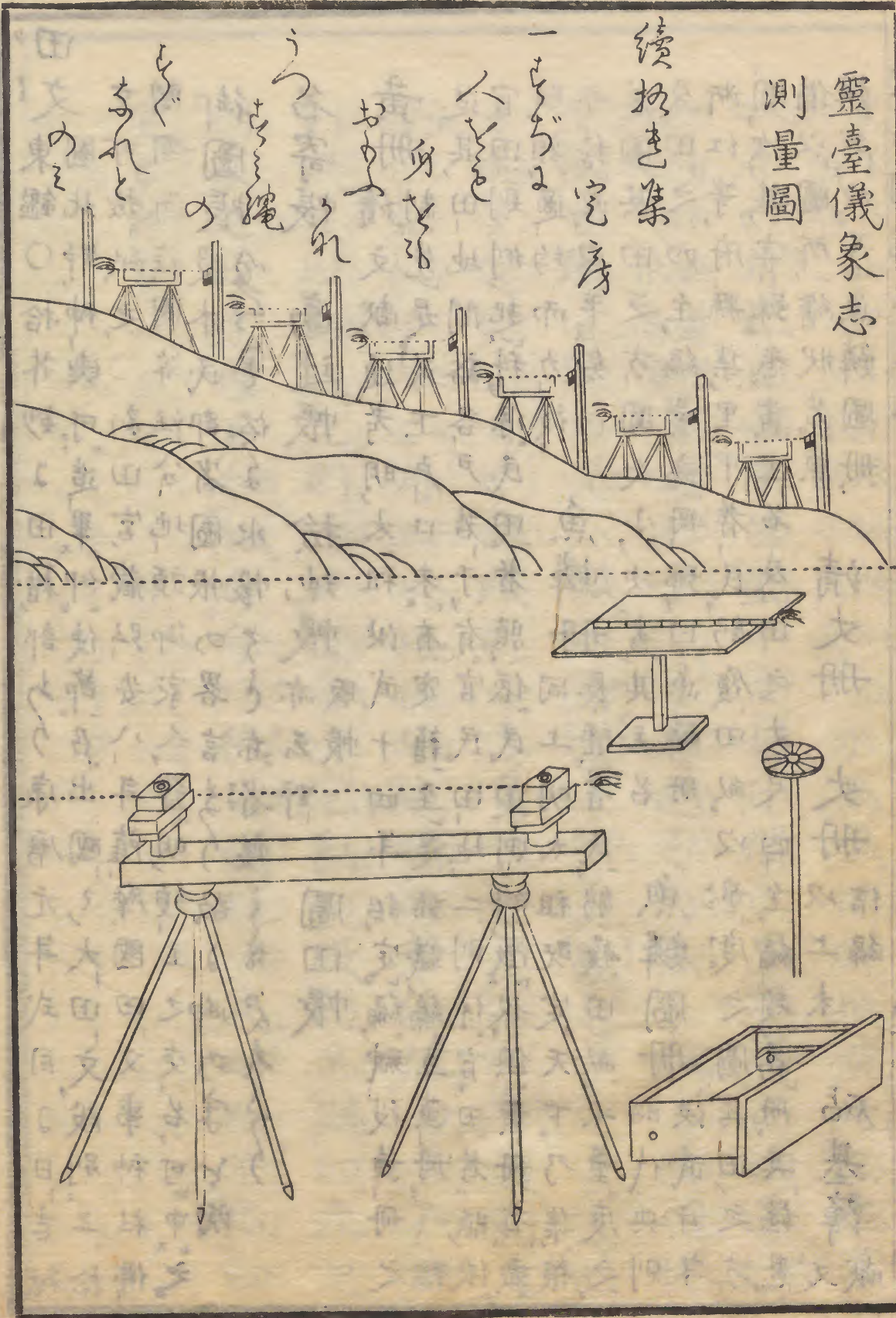
亦稽此以平矣 魚鱗冊 長暨耆民躬復田畝以量度之
 遂圖其田之方圓大小次書其主名 魚鱗圖冊 昭代典則

及田之四至編彙為冊號曰魚鱗冊 魚鱗圖冊 洪武計年
 浙江等府縣集里甲耆民躬復田畝以量度之圖其田之方
 圓次其字號悉書主名及田之丈尺四至編類為冊其法甚
 備以圖所繪狀若魚鱗然故號魚鱗圖冊 清丈冊 丈冊 以上未
 成形成圖說卷之九 九 占基簿 文

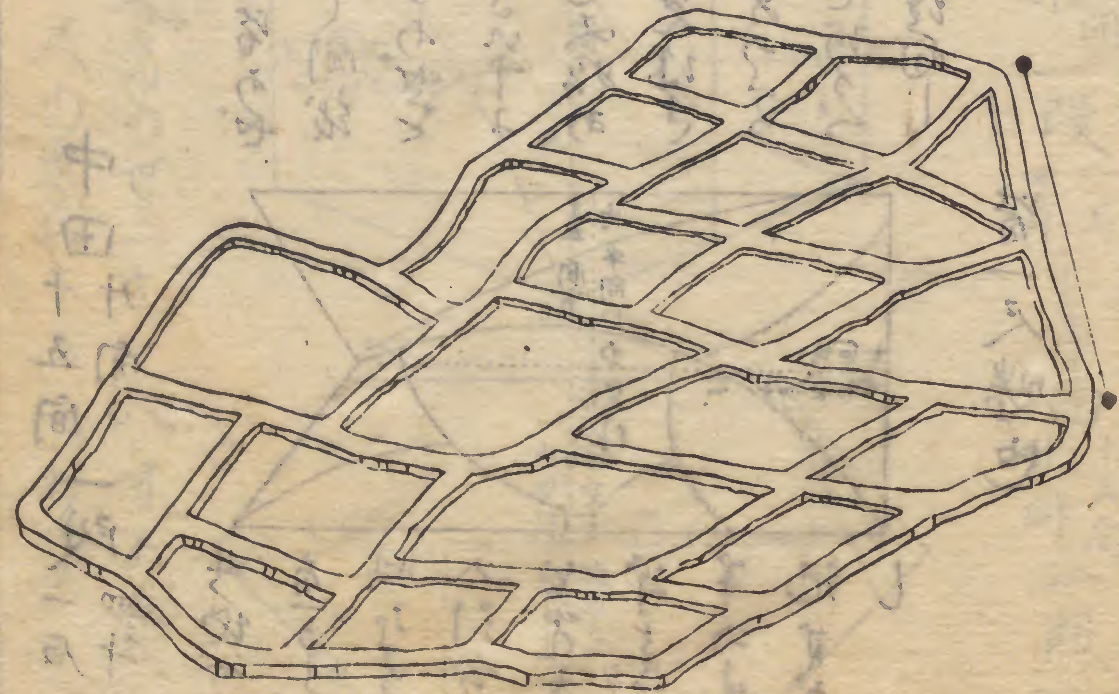
靈臺儀象志
測量圖

續抄集

宅房

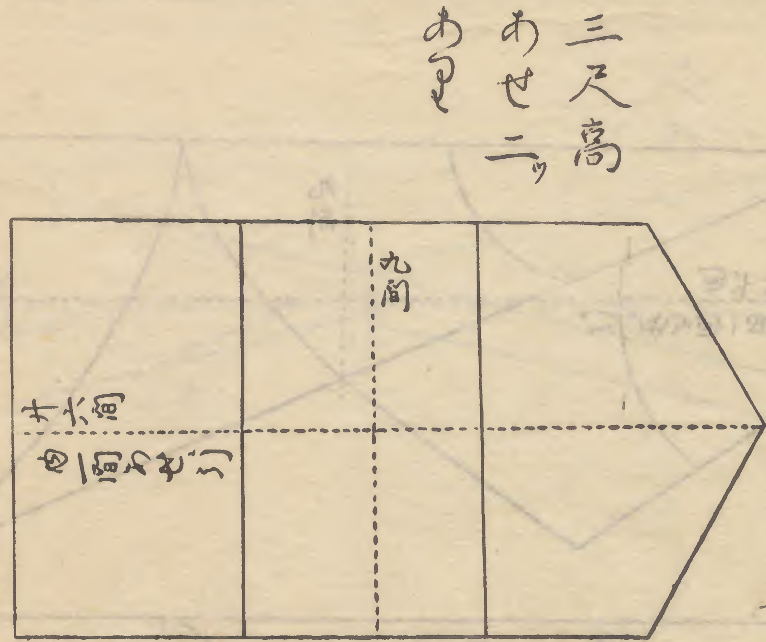


此景能令ハ黒圈初見の
角の方子あはば羅針と
備へ第二の角と度里を
方向針盤の何分ある
と記し其間の長短と麻
索の度里何分何尺ある
と記し其間周圍と皆
かくして度里終り角
方向并にその角の長短と
記し後て記しよりて中
圖と能く準し尺と
きハ圈内何所行ぬと
去とを漢字に記しあり



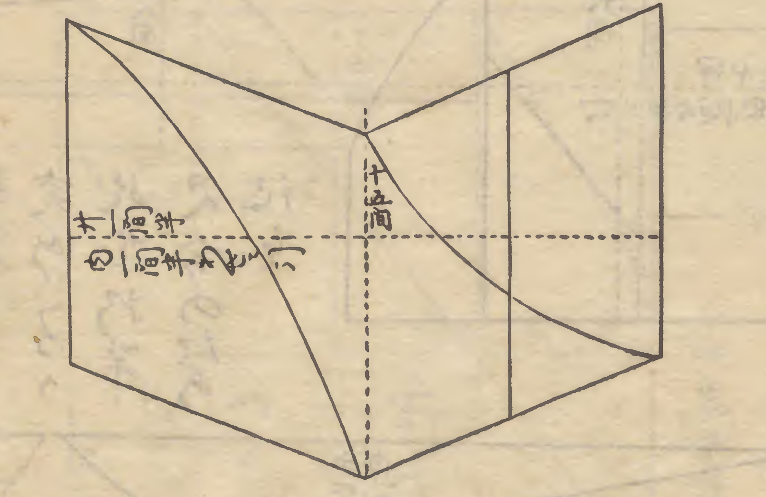
成形圖說卷之九

此石附々来々号一
外又高々号也



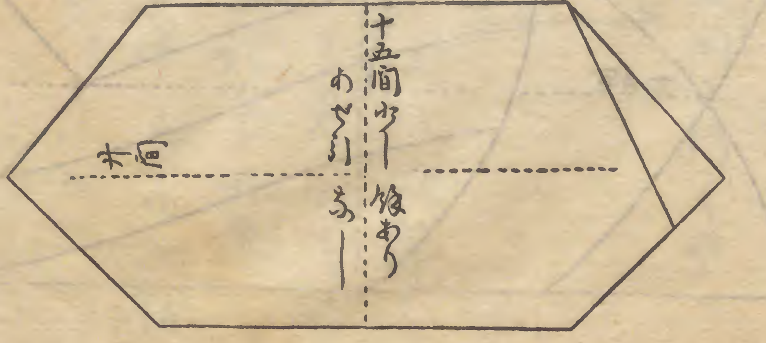
下田 九間
廿五間 七畝拾五歩斗九

横三尺高あせ二
外一尺あせ也



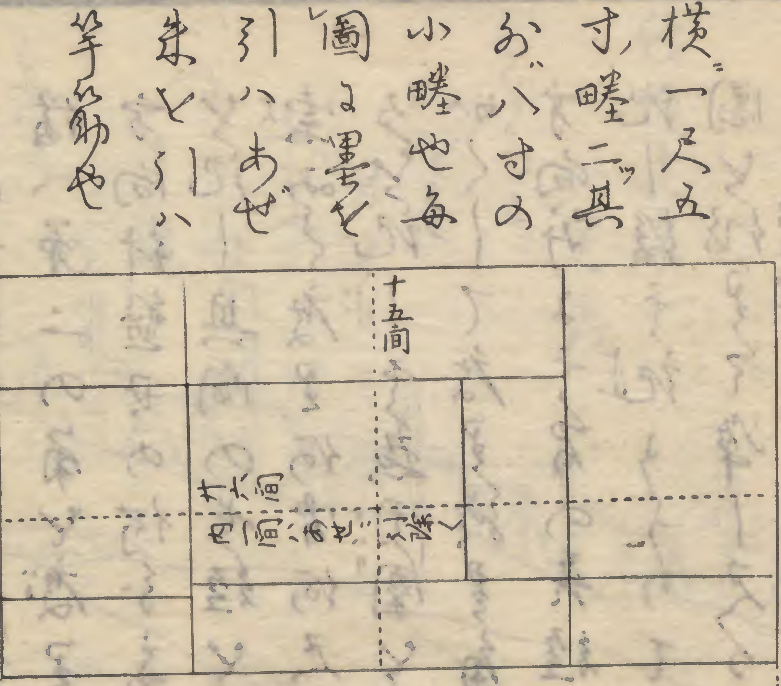
上田 十五間
廿五間 一段一石四斗

八寸あせ
一ッあり



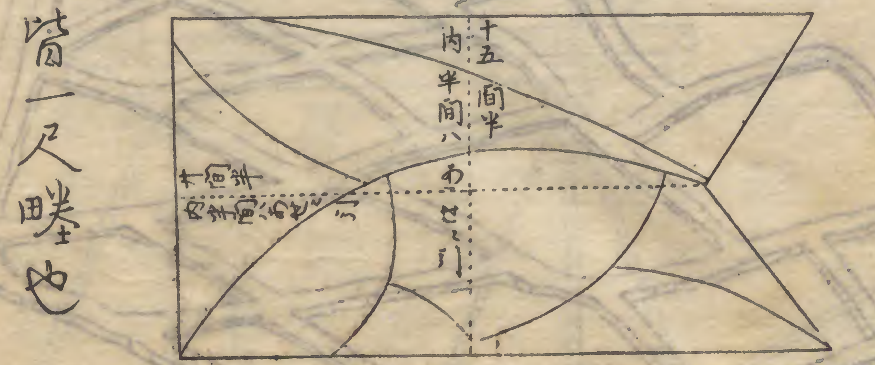
中田 十五間
廿五間 一段一石二斗

上田 十五間
廿五間 一段二畝拾五歩二石

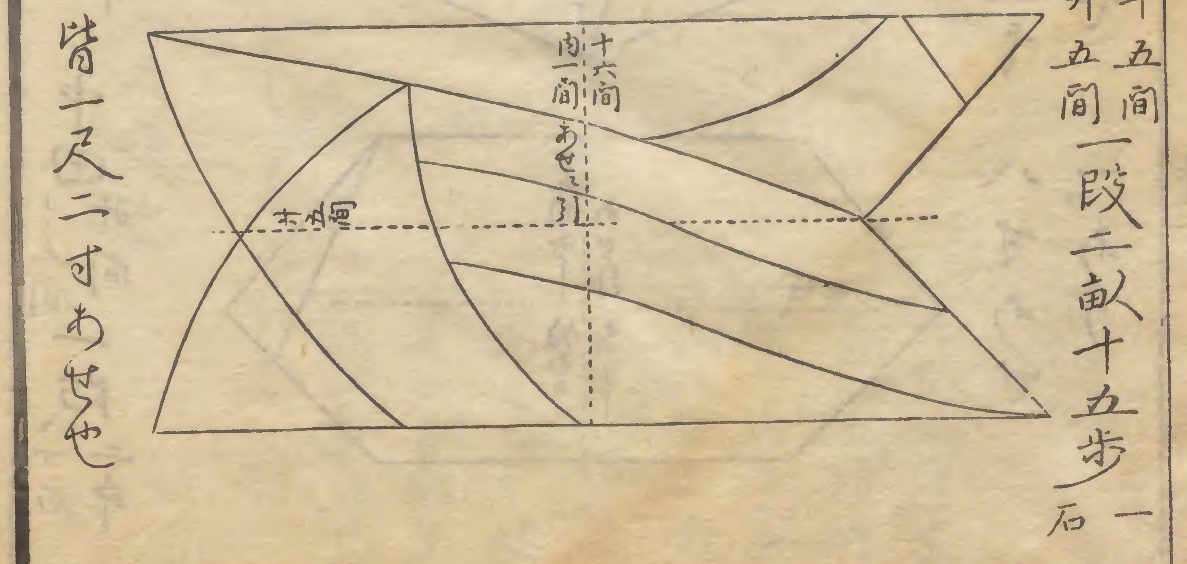
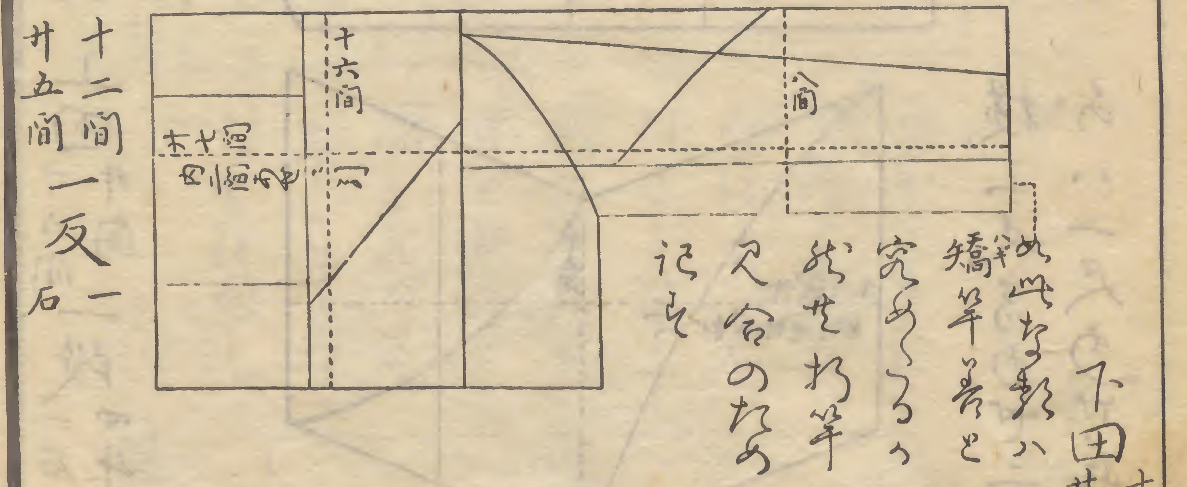
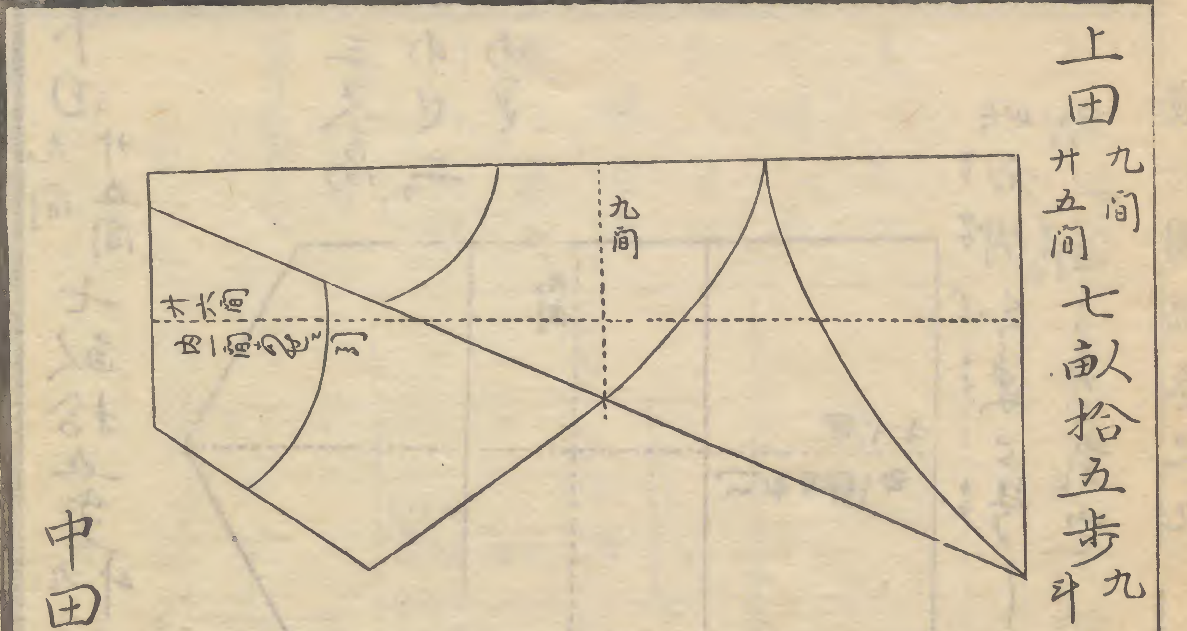
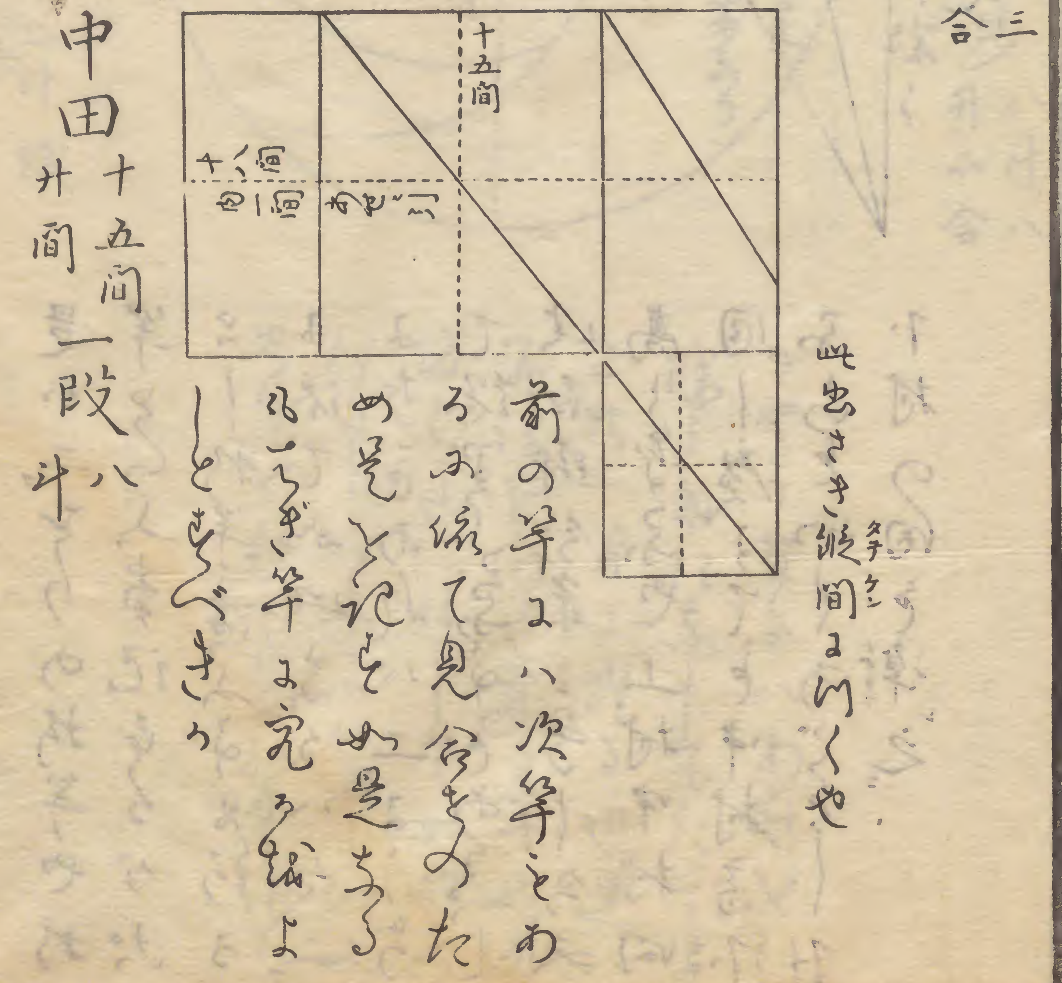
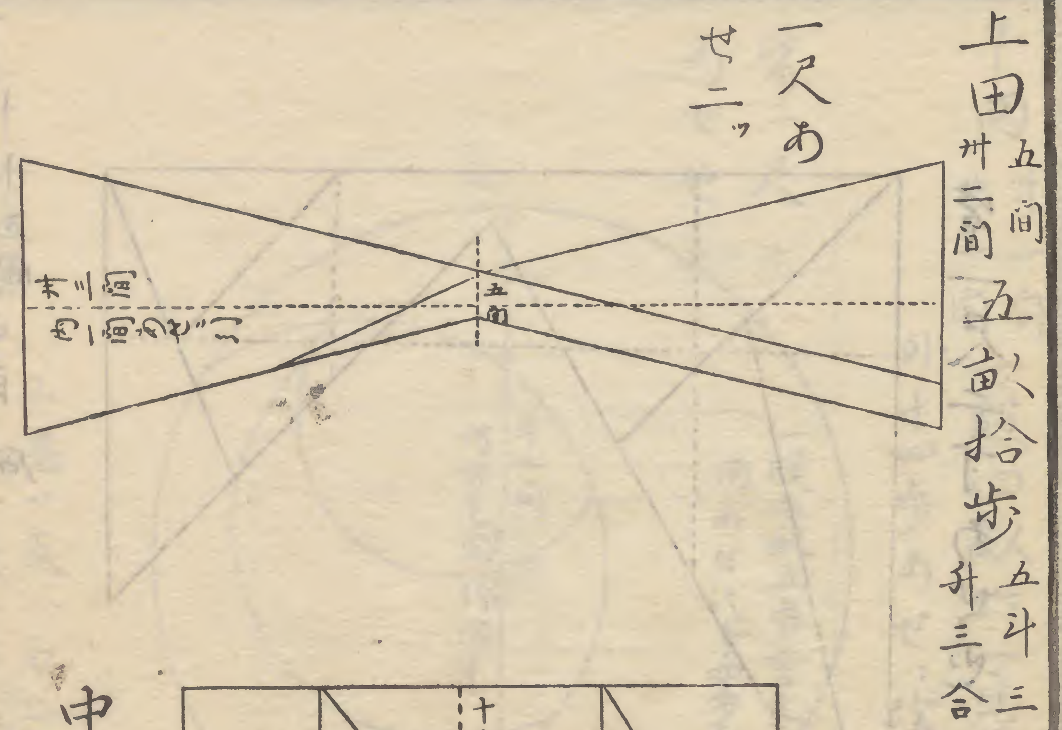


此家八階あせ
と終て間張
歩後又あせと
引くさる干
えろ也又始あ
せと見ゆき
間とえろろ
竿とあろろ
しと理同し

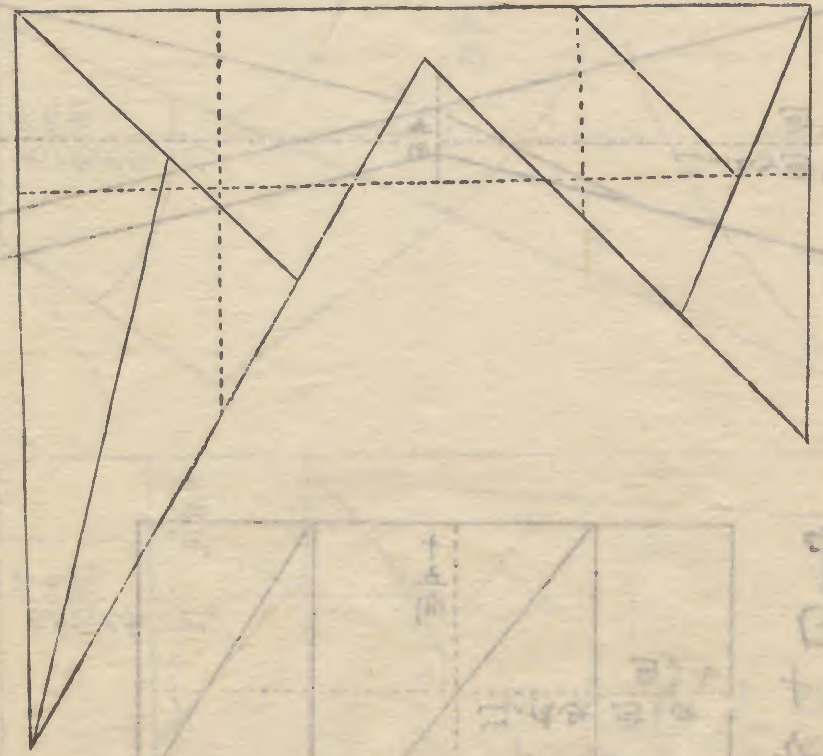
中田 十五間
廿五間 一段一石四斗



此地一方界
直うはらぬ
此ちろま出
入引合せ間
とえろと矯
竿と号く矯
竿の号あ
記すろと
し



下田 十二間 一段 一石

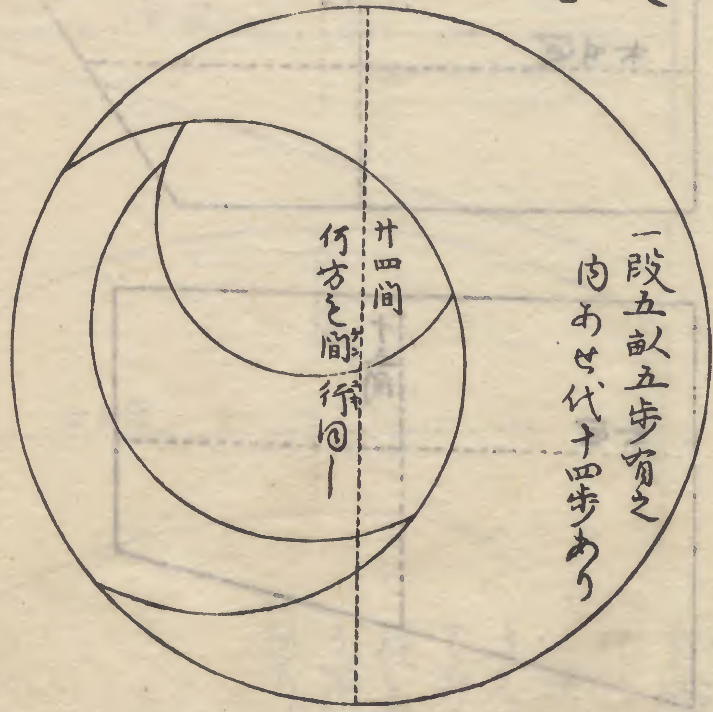


皆一尺二寸あせ也

是ハ二、三りの折等也折
等とらふ事記さるがた
こゝに折等遠くふりたる
こゝ依て如此さるハ二、
よちをあれバ二、三り
て総里とるふりともあづし
は石附を来と号し又
高とるふり也上村中村同
同一度とてと申村高下
ふちとこれのどと下
下村の田を準之

下田 廿一間 一段 四畝 廿一步 八斗 八
廿一間 外十四歩あせ 除く 廿二合

皆一尺
あせ也
一段五畝五歩有之
内あせ代十四歩あり



廿四間
何方を間行回一

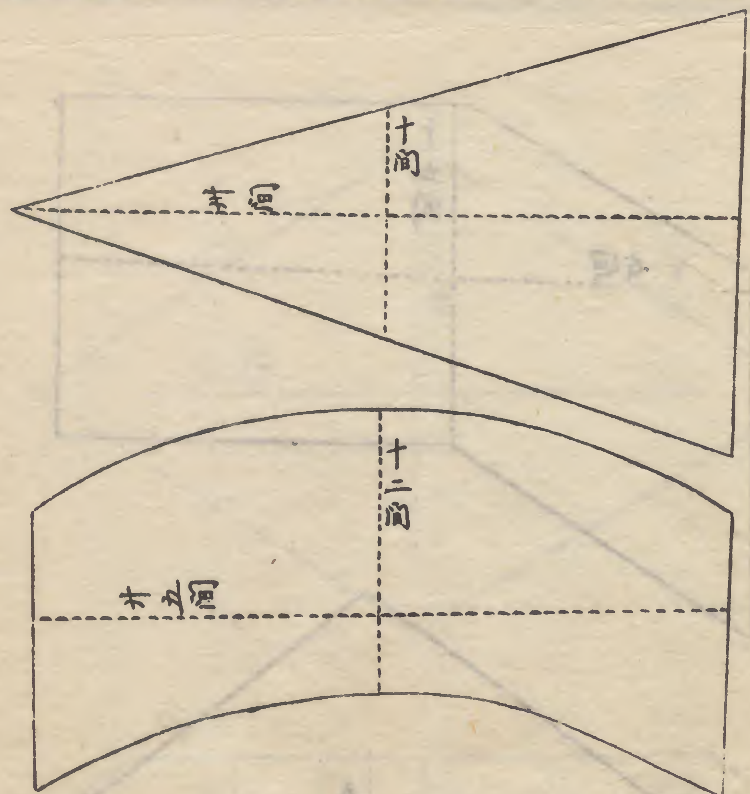
りやうなるハあせと引
除き本にふりてたてよ
こは一内よる也是ハ
算法とていゝ究る等也
成るにに殘して如此
なることよハあせは又
りやとあてを知事り

上村畠檢地

上畠一反一石二斗賦
中畠一反一石賦
下畠一反八斗賦

成形圖說卷之九

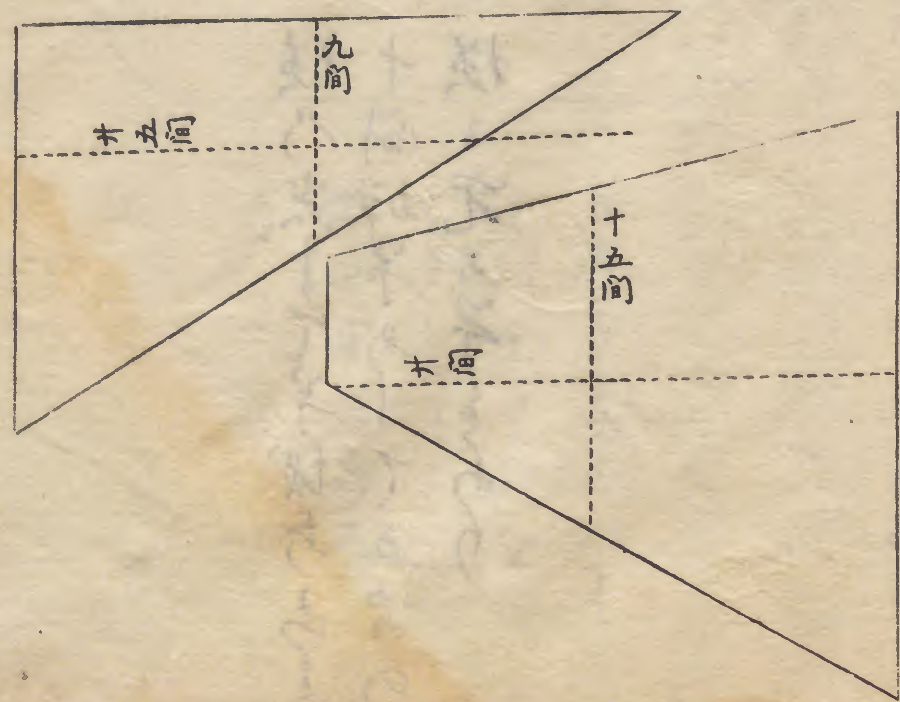
下畠 十二間一段斗六
廿五間



中畠 十間一段斗八
卅十間

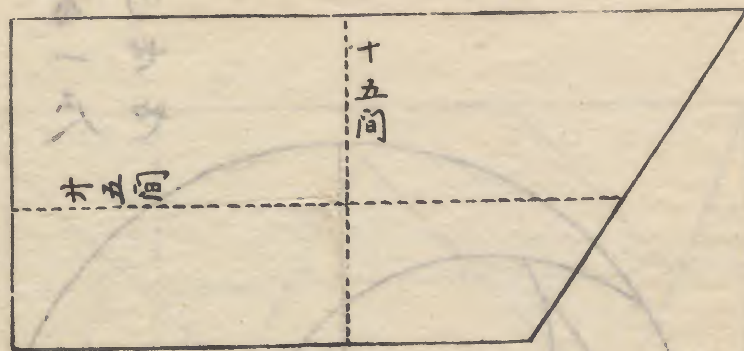
所よ
至
地
の
形
ま
ま
と
て
お
く
横
と
宛
る
等
と
り
り

上畠 九間七畝拾五歩斗六
廿五間

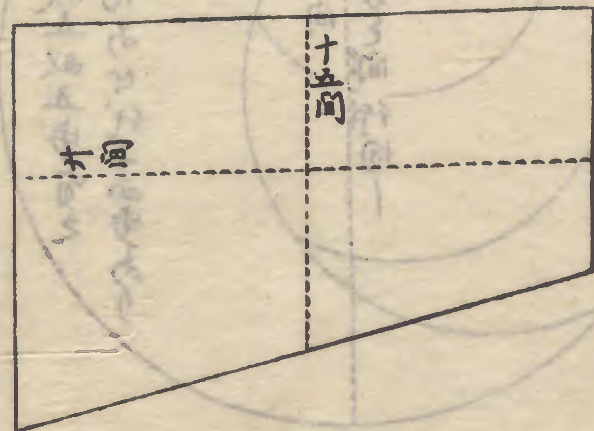


中畠 十五間一段斗六
廿五間

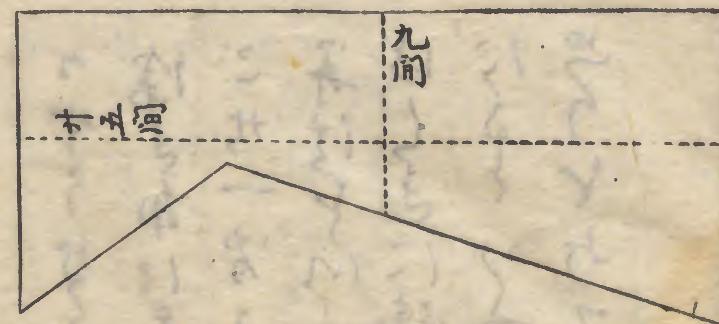
上畠 十五間一段二畝拾五歩一石
廿五間



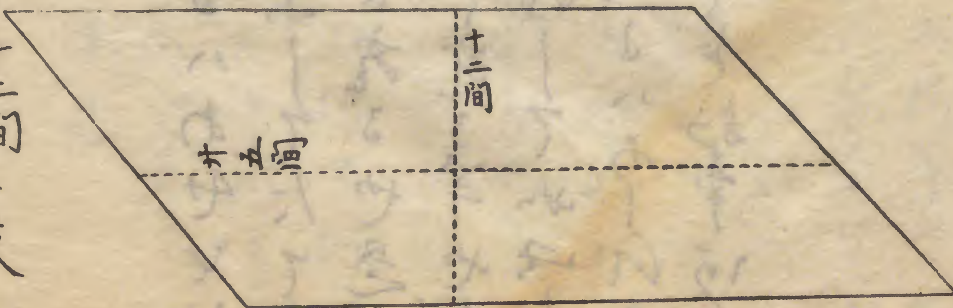
中畠 十五間一段一石
廿五間

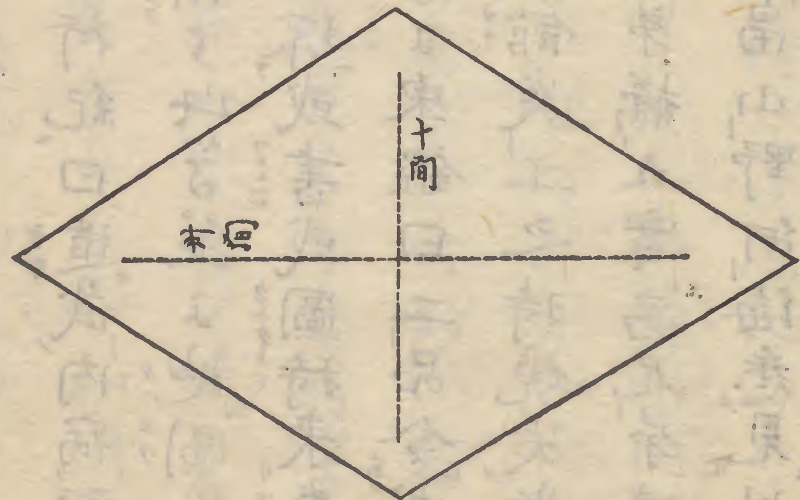


下畠 九間七畝拾五歩斗六
廿五間

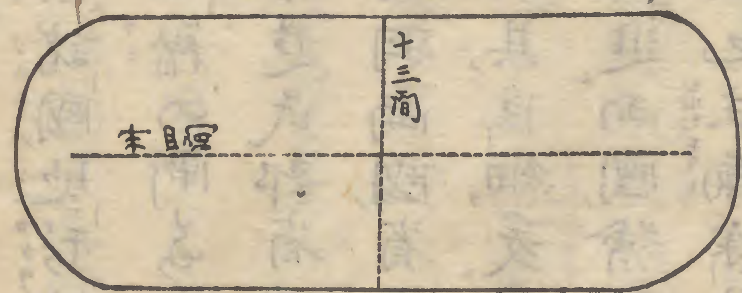


上畠 十二間一段一石
廿五間





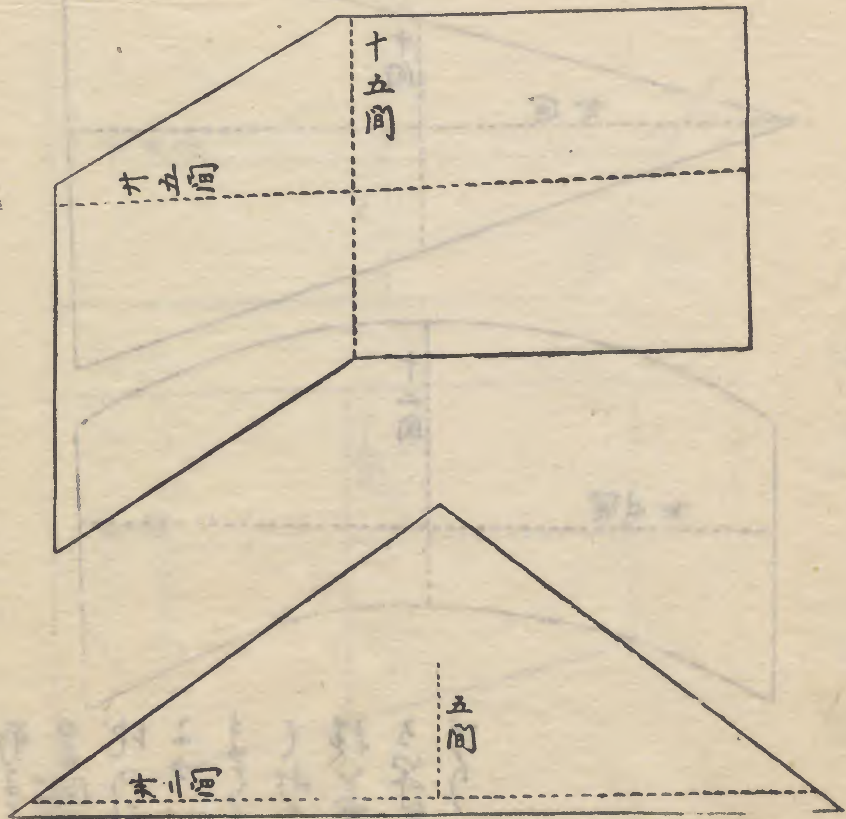
中畠 十間 一段 斗五



下畠 十三間 一段 四畠 斗四

う屋うまゝハまろ
えけ出さたと偶々
たか角まゝてたこ
卅四間より打登り

下畠 十五間 一段 二畠 拾五歩 斗五



上畠 五間 五畠 拾歩 三斗七

横乃尖まて竿地あつて
十間折竿あつて五畠の
横に究る竿もあり

通考宋紹興中圖寫墟畝選官按覆令各戸各郷造砧基簿仍示民以賞罰

蕃名Pフテ一ケニングハンテランデレイン

景行紀曰遣武内宿禰察諸國地形欽明紀曰檢定田部丁

籍此等並地圖田籍の漸より孝德紀曰宜觀國々

壇塙或書或圖持來奉示是民部省圖帳乃原始より

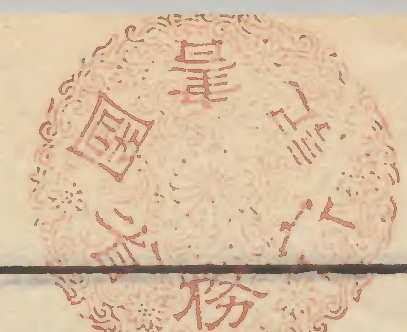
按東鑑曰二品令求奥羽西國省帳田文已下文書而平

泉館炎上之時燒失難知其巨細爰奥州住人豊前介實後

并弟橘五實昌兄弟暗注進西國繪圖辨定諸郡券契郷里

田畠山野河海悉見此中也注漏録目三所之外更無遺失

とんえりりとも奥羽ハ扱りの大國もろくも實後兄弟



其省帳田文郡郷田野のまご盡諳ハ辨識とらふと

殊特々々強記より右の口々相待下年ハ拂ハバ心ハ勤

や一々々稗田阿禮讚岐永直等の聰明英才をとり

考ぬわがまごまごも邊裔ハ強識諳算の術ハ

生まご々奇妙の教ぬまご者けりあり一々々事々書籍

よ委てより其の讀書ハ文字上の精まごより自修の成

ふま一丁字と識まごふまとも考もろ者何り是書ハ化る

が各々々々和訓栞白津國豊島郡南郷村の社司今西

氏の流ハ田文あり寸紙の如く幅一寸あり厚さ界

引て又横界何りて山川田畑墓原まごつて横ハおてあ

延喜初より文治五年御檢注加納田畑取帳とあり○延喜
 式勘造授田帳書生四百二人紙三千八百張又班田使
 祇承屬一人從ニ史生三人從各書生十四人從各とあり
 凡常の檢地と致すは奉納二人帳附二人勘定三人等取
 使共より八人程を一隊あり水帳と造るは田畑取
の野帳二通并に田畑取
百姓一人勘の野帳二通以上三通は仕立御中一紙一色と
のまじり公義の野帳二通づつよりいづれか物書取人より通
内者より野帳二通ともいづれか檢者の自勘より村の葉
間何間より野帳二通ともいづれか檢者の自勘より村の葉
皆々守達いさきやうに帳に記さるる檢者ハ田畑の
畔と油断ふくまぬ等と植るハ田畑よりいづれか
の宿不心一方より見分志ハ守達ありとありあり等

と植は境よりいづれか至る處と續く地方と云ふより○百姓
 より授る田地の内はハ者よりハ美田一區つゝ向當おく
俗ハ大國檢と云ふは此向と實地よりハ他へきり
ハ金賃などの者ハ此向と實地よりハ他へきり
上田と實地よりハ此向と實地よりハ他へきり
のり素向ハ此向よりハ此向と實地よりハ他へきり
かきり等とハ此向よりハ此向と實地よりハ他へきり
上よりある米と下より得る米とと勘分てその畝儀控
重なることハ此向よりハ此向と實地よりハ他へきり
年等より辨あざしの上見竿の何ハ六尺竿より四圍とハ
その内の穀子と席より上せよりハ此向と實地よりハ他へきり
一歩分

と擬して畝町よりき何れぞと究る也○門割地とい
 ふは一村の門々盡衰ありて百姓立に親疎ありて田
 地と校割カウカウもろふとたるを望み山田を究る所を年經て
 下田を賣里又下田を山田をかりて高結物成の輕重等
 かしき由志中墨の半と入て田地と割配各税則と平
 よと敷とつふ酷吏をゆるちぎむ丈出とすして公の
 益たるといふは反て和の培免よて百姓と傷みよの未
 皇政刑大觀云自丈量至今已逾百餘年桑滄更易攤沒無
 算是之く門割なきゆゑ田畑の乱らうとす○或
 謂格化ハ百姓窮も次田税もゆと第一と云農史ハ品税

則の格とのを是事とありよの由志格地の究やうとす
 志望おのま不辨まとい流やば村中格と夫ハ勤とあり
 かぬる中を何り是事と執りの必當とハ能登るる次方法
 とハ知志じ登るる次通鑑宋紀云及其既種有司履畝增
 之故民皆疑懼と履畝ハ歩法とて畝段と究るもとあり
 ○凡上村の百姓下村へ引移して上村の田と換ると以上
 村よてハ出換とて下村よてハ入換と云又凡上村名の
 者よわとて地より事りてその田地と換るとり入地
 とすともあり○祖の代ハ行百石ありてと子孫はわりの家
 来よと換その後換地入るる時水陸の漁釣或の者と肩書

子集の集は誰に記は是と云ふ附と云ふ家本は徳のり
 家抱と云ふ年直請段も熱願式の方にお返し今頃の若地請
 手前分と一所も諸段の責とね務りあり永代小作と云
 大氏おし準り凡回地の申よと云と控して穀物等
 下り田は極りる所おれは下り田は村中の割配り
 地は各段とも附きよき地は地を交してと云ふ
 子集大と云ふ種と云ふと云ふり畑と云ふと云ふ
 せざらんと云ふ○池沼原字の新字の見方の上平入
 高日地は地主は立て丸菊の起りと云ふと考べり四五
 周程と云ふと云ふ神社仏堂稲干場土瓦場墓所石塚記牛馬

捨所等入るも云ふハ段別を法のお書よ証書といふ下り○百石
 の村五十石づつ二段と云ふと三十石づつ持てる者二人と云
 也が六十石と云ふと云ふ石づつ一人他段の者十石
 とも持てると持添と云ふ○田地も少と云ふと云ふり末ハ職
 人ともあつて一人づつ種と云ふと云ふと云ふと云ふ
 小高も城て後には各各る者とも果はと云ふと云ふ
 者ともあつてと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 たり○凡一村の總かたとして徳藏重なりと云ふと云ふ
 苗村の中田と云ふ準て家も云ふと云ふと云ふと云ふ
 宣りと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

役顯宗紀福 徭持統紀○通證 人夫貞觀儀式○天武
と刻也今夫 夫足室町 夫凡人足 紀よ於保多如良

役丁 晉書○河拍齋集云民財空虛弊議仰惟國朝使民之
法除里甲正辦外如糧長解戶馬頭船頭館夫水夫馬

初法令嚴明緋食有數故民力未至甚勞近年以來則常役
之外雜徭夫役紛々而出如所柴夫檣柴夫修河夫修倉夫

運料夫接遞夫站夫鋪夫開夫淺夫之類因事緋食蓋有不
可勝數者矣此他レ修瀾夫修隄 公役 子徭役漢書福

夫膳長の名明會典ニ出ル 野役 同上若起野役遂
作 田役 同レ太宰之職以八則 人各帥其所治之

民至千遂之 連丁 仕學 運夫 筆談 人夫 荒政 要覽

大旗之下 藩名アーンテリングテルホルツ

夫使民以時時以作事事以厚生不違農時為小皆民の農

隙と時ふて公後と課とふり皇極紀大兄王曰願

十年不役百姓以一身之故豈可煩勞万民哉孝德紀曰於

農月不合使民又曰凡仕丁者每五十戸一人以充諸司續

紀寶字元年詔曰自今以後宜以十八為中男子二十以上

成正丁 按書言故事註唐制男子二十一歲差丁役隋文帝

又唐書授田十畝歲輸粟二斛謂租丁物部氏曰蓋男子二

八而精通有為人父之道當是時士大夫之子志為士大夫

農工商之子志為農工商其無志者亦衆矣迺如昭公十九

有童心是也三十而受室受田始稱一夫前是則餘夫也

賦役令曰凡正丁歲役十日若須收庸者布二丈六尺一日

二尺六寸須留使者 謂正役之外滿三十日租調俱免役日

少者計見役日折免通正役並不得過四十日次丁二人同

一、正丁其丁起役之日、長官親自點檢、并闕衣糧周備、然後發遣。若欲雇當國郡人及遣家人代役者、聽之代役。即今の名代役と云ふがごとく申比より、清負と云ふも、
もるも亦代役なるを和訓葉よりけめん。保人あり未信
編取保とありはらげと云ふも、
生五男、成正丁免父課役、雖一人闕猶、役免除。凡式は諸國
毎に正税の外修理料、池溝料、及堰河坊料と云ふものハ
一切は田地用水の川溝、隈塘子年々の修覆雜費、及夫飯
米を充給儲の爲に差を充てり。聖武紀に遠江國
荒玉河堤決、三百餘丈、役單功三十萬三千七百餘人、充糧

修築と云ふは、
百萬人丁男、不充以婦女充役、と云ふ文獻、通考より云ふに、
臨時の大修理と云ふで、ハ是れとの夫役ハ、最稀なり。
通證曰、後土帝明應八年九月、遠江洪水湖決して水涸、
成陸、今名今切者、其決處也。歷代備考曰、後柏原帝永正
七年八月廿七日、遠州今切洪水高浪、瀆名驛橋共、
海中に轉没を感云、山津波にて宝螺の出、
と云ふ。聖武の御宇、既又堤吹切、
と云ふ。蓋水脈の去り、
役丁と云ふて、田地等の繕修と云ふハ、
凡、人夫と集、
焚て、
小打出て、
成形圖說卷之九

うは村役人と婦人は是と不精なる者なり又是より
不坊なりは是より名主の害なり福元より人足五人と
福治ハ三人と出一定は是より欠て村方へ働やう人
とれども是は我所持の金と引田地なく己よりなる
がはゆふはしてはめて福元人足又ハ是より遣せて村
村事よりなるより名主組以は保とる○夫春ハ掛を
僅ハ秋ハ之のりも收め且ハ是と通一川と後ハ又ハ海
江と後き山野と実き地と修め陵と平ふと是のりも
何ふりありあき凡ハ席上の軍議とおふりくは場
就て其功と致分の実係と踐がれば空論なる○前

謂清貞とらふと田代川瀆土木運輸より何々とも
て助役修管とて官に金を納て官に金とめて支用と償
あり又高買の徒官も請て金と百姓より募出さしめ己
の「まきてき用事と包辦あり共より中より取て
利と射の計とも次も色に後世多くは冤屈と被る少か
らび大學衍義補に樸買者通計坊勢該得税錢總數俾高
先出錢与官買之然後聽其自行收税以為償也元初有以
銀五十万兩樸買天下差發者有以銀五万兩樸買燕京酒
課者有以銀一百万兩樸買天下河泊橋梁渡口者耶律楚
材云此是姦人欺上罔下為害甚大咸奏罷之樸買ハ此云

清負取の事あり○農民の難為尤命は堪がはるものハ肩
御錢カ丁役より甚しハハ又従て轎夫馬夫は充ら
はハの人の肩の骨と傷馬ハ脚の蹄と利ハ玉とさる
ハハ一劉陶鑄錢議云夫欲民殷財阜要在止役凡而姓ハ
耕作と勤人とおりのとと役多しハ耕作芋の暇
なくんは播種の時も元は是は後をいふと其のあり
阿きか山阿が阿も種を種さハ必は天風多しの時
は遇て不納の年ハ及も阿り風雨の事ハ天氣の志
こまされハ人力のいふんとも多しハ阿り阿り
皆ハ風雨のむねは形ハ阿り阿り阿り阿り阿り阿り
阿り阿り阿り阿り阿り阿り阿り阿り阿り阿り阿り

とあり周公詩追天之未陰雨徹彼桑土綢繆牖戸とい
ふと云いて用いんやと云いんやと云いんやと云いんや
の常ハ懈弛ハ愈々又夏之閑暇と云いハ僅ハ十
二月より正月までハ内中ハ固て年中の省少の違阿
らハ炊爨ともハ食と葺き索と綯ハ席と織里苞と編
農具と繕ハ家事と務ハ但ハ風雨の百姓ハ冬より春
は必して氷雪ハ封らるるや由の業と勤め程子云
古者功任之事皆於冬月間隙之際如修完室廬墻垣之類
皆為来年計皆是一歳之事既終則慮其始也惣して畦溝
塘隄ハ必して犁擺種下秧挿又ハ草木と刈伐肥養と

運めり水陸乃事多しと云々一按毛詩執官功註
功葺治之事也或云公室官府之役也王制云用民之力歲
不過三日是也賦役令は凡正丁歳役十日とあり然れど
和漢書よりみれば農を回し軍役と勤しむ賦をれば
之時の農ハ耕作のみならず士ハ使務軍事と知はる
ふゆ急を今一換ふハいふ事且古と遷変して諸倍
諸工過あり又僦者傭僱高僧漁獵をく民戸の等分析
穀浪とありさうは下夫の役も若ハ百姓より
さうざむりとのぶとく歳は三月十日さうの公役とい
ふとのいきて全一日よと三度一月ふと十度さうと
駈

従らざる者一申おまてハ一月は三度の役もあつと
患とやよしとすは三度ハ六度よりなりハ十二
度とあり十二度ハ乃皇サ四度とありは民いぐ
命は堪ふと續紀曰無知百姓不閑條章規避徭役多有
逃亡涉歷他郷積歳忘帰其中縱有悔過還木貴者縁其家
業散失無由存濟望請能悔過帰者給復一年継其産業建
武二紀仕丁役事以十町田地毎年一日役可令勤仕也
とありとすれば後醍醐天皇の御宇より一年一度の
夫役とありと見えると夫ゆゑ是利氏の時より一月
ふハ八九度の課役とありとわが城未嘗その難儀とい

凡之儀久記に國々に守護と云き郡郷之地頭と云き段
別兵糧と云取る者領家ハ地頭と云ぬ地以ハ領家と
あしと云建武記曰町別錢貨人夫傳馬事稱先例被懸百
姓之條不可然向後以撫民之儀可為領主之所役應仁記
ハ段別棟別と云くの換と云して遺責とれが必くの
名主百姓ハ耕作と云地と田畠と捨てて食し是ハ任
て云くはゆとありしりより出浪出浪ハ百姓の羅極
しと云くはゆとありしりより出浪出浪ハ百姓の羅極
ハ金子二分或二分二銖と云の租と通例と云云と云
あめりみと云大莊頭と云く出浪と云とありしり

夫農の物本と云云ハ米穀と云は是と米牙ハ零糶と
るハ豊年の時ハ米價錢して又凶歲ハ米直騰貴と云
いどと市ハ鬻と云きこの粟顆と云一是農の者ハ秋と云
事と云ふと云き百姓の課役免と云くハと云くハ
の恒係とて中不就て 仁徳天皇浪華高津宮ノ都ノ玉
ハ浪速上古圖說曰高津宮の舊址 登高臺遠く眺望と云
ハ今の東高津村高原の地と云 登高臺遠く眺望と云
ハ乃詔曰烟氣不起於域中以為百姓既貧而家無炊者封
畿之内尚有不給者況乎畿外諸國耶自今之後至于三載
悉除課役息百姓之苦自是日始黼衣鞋履不弊盡不更為
也過飯煖羹不酸餒不復易也三稔之後諸國悉請曰課役

並免既經三年貢稅調以修理宮室然猶忍之不聽矣十年
甫科課役以構造宮室於是百姓不令而扶老攜幼運材負
簣未經幾時而宮室悉成故於今稱聖帝竟宴和歌集天慶
六年 仁德天皇と詠む師輔の歌大鷦鷯天皇がよ
いふ山煙天のいつぎともえほふる其三年ハ尚有る
一十年課役と免されしと豈奪むしとの謂ふん
や皇帝の聖とる所以なるを七錄齋集賦役論云以版
籍天下之甲兵以墾田定天下之賦稅國家之定制也而因
時通變之道亦存其中唐之租庸調租出於田調出於家庸
出於身令不煩而易守而又有役二十五日役三十日之所

免水旱蟲蝗十損四十損六十損七十以上之所免則周官均
節之遺也然兵興以後籍亡而征重其勢不得不從於地斷
此揚炎之改租庸調為兩稅與張說之改府兵為彍騎未可
同日而論也畧夫宋乾道之時汪灌一松陽之民首倡義役
彼先後視籍田多寡視等行之三十年訟不抵於有司而謂
太夫師長不能叛建規模成循理之鄉信義之里亦天下之
所不信也是故仲尼不對季孫之問田賦漢高怒責蕭何之
治未央萬世之計皆慮之於微而究之春秋所書宣公之稅
畝成公之丘甲哀公之田賦惡其大變古而亟思復者惟在
周公之典則今之所謂周公之典者何為乎郊祀之戶籍薦

天大誥之峻誅五賊吏亦其意也



成形圖說卷之九終

四十四節六十一節五十一節五十一節

